



地震の予想をまず知ろう

アンフィニホームズ(株) 代表取締役 吉川 均

2011年3月11日、三陸沖を震源とした観測史上最大の東日本大震災は、死者・行方不明者2万人を大きく超え、建物の被害は全・半壊を合わせると27万戸、被害を受けた住宅は40万戸に達しています。私自身、建築に携わる者として『安全な住まい』とは何か?という事を真摯な姿勢でとらえ、アナウンスしていくことが大切であると強く感じました。

前回(3月5日号)、誌面でも書かせていただきましたが、「安全な住まい」を考える時、単に耐震性だけに配慮しているだけでは不十分である事が、この未曾有な震災で証明されたわけですが、95年に起きた阪神・淡路大震災では、倒壊と火事により多くの人命が損なわれました。一方、東日本大震災の南三陸地方は高さ16mを超える津波に街をもぎ取られ、気仙沼では石油備蓄施設が火事となり、街は火の海と化しました。震災地を遠く離れた千葉県や茨城県でも第2の震災ともいえる液状化により、住居の不同沈下やライフラインが寸断されました。

今まさに『安全な住まい』とは、 起きうる地震に対応できる「耐震性」

「耐火性」「津波対応力」「耐液状化」「地盤と地形の対応性」と、その「老朽化されない継続性」が問われていると考えます。高台に住む方にとって津波は関係ないとい

うものの、その地盤の断層がどうなのか、盛り土による不安はないのか、また土砂流のリスクはないのか、さらには、海岸付近の液状化に加え、内陸部にはその心配がないのか、など、今回の地震で地盤や地形にも大きな関心が集まっています。

東日本大震災以降、家造りに対する考え方が大きく変わりました。今まで重要な条件であった「コスト」や「間取り」から「耐震性」に取ってかわり、土地は「利便性・方角」から「地盤と地形」が重視されるようになりました。

日本は地球の大きなプレートが4つばかり合っている位置に存在し、活火山が108個あり、活断層が2000以上ある地形です。阪神・淡路大震災以降、震度6強を記録する地震は2年に1度くらいのペースで発生しています。連日地震の予測などが県のホームページでも開示されてい

るのでご存知の方も多いと思いますが、静岡にその危険性が予測されている地震と、どのようなものなのでしょうか?

県の第3次被害想定から引つ張り出してみると東海地震単独の場合と、最近騒がれている南海トラフ3連動の場合では、地震の規模はまったく違うようですが、単独の場合でもM8.4で阪神・淡路の約1000倍の地震エネルギーといわれています。倒壊などの被害建物は23万~27万戸で、倒壊による下敷きや生き埋めになる人は2万8000人、さらに4600人が死亡し、倒壊による圧死が80%とされています。県内は1分ほど震度7~5強の揺れがあり、その影響で液状化は13万1000戸、津波は静岡市清水区から駿河区の沿岸に5.4m、焼津に4.5mと予想されています。

阪神・淡路大震災の時がM7.3で、死者は6400人。26万戸の全半壊であった事を考えると、間違いなくそれ以上の被害になると考えられています。阪神・淡路の1000倍の地震エネルギーとは、想像することも難しく、第4次被害想定も今夏に

発表される予定です。

また、阪神・淡路の時も液状化が神戸港を襲ったのですが、幸い津波の被害からは救われました。しかし、今年3月の内閣府の発表により、南海トラフ巨大地震発生時において静岡県はM9に引き上げられ、津波は清水区・駿河区において5.4mから一気に10.9mと倍以上に修正されました。東日本大震災の時、M9が起きた栗原市の木造住宅倒壊が思う以上に少なかったのは、「キラーパラス」という揺れ幅が少ない現象のためといわれ、それを静岡で期待するわけにはいかないでしょう。M9の場合、通常の木造住宅は1秒で倒壊するといわれています。

弊社は静岡で20年以上、コンクリート建築に特化し、全国の仲間たちと新しいコンクリートの施工システムなどを共有してきました。気仙沼港の先端にぽつんと残った3階建てのコンクリート住宅、そして、16mを超える高さの津波が襲った南三陸で残った唯一のコンクリート住居は、私たちの仲間と同じく新しい工法の住宅なのです。

今回の東日本大震災の地震や津波で、この地方のほとんどの住宅が基礎だけを残して壊滅したなか、大きな破損もなく残ったコンクリート住宅の耐久性の差は客観的事実として、厳にこの場所に現在も存在し続けています。この建物のメカニズムを含め、「安全な住まいとは何だろう?」というテーマで、「耐震性」「耐火性」「津波対応力」「地盤と断層」などをテーマに、シリーズ化していきたいと思っています。

◇問い合わせ、054-345-9000

www.infini-homes.com/